

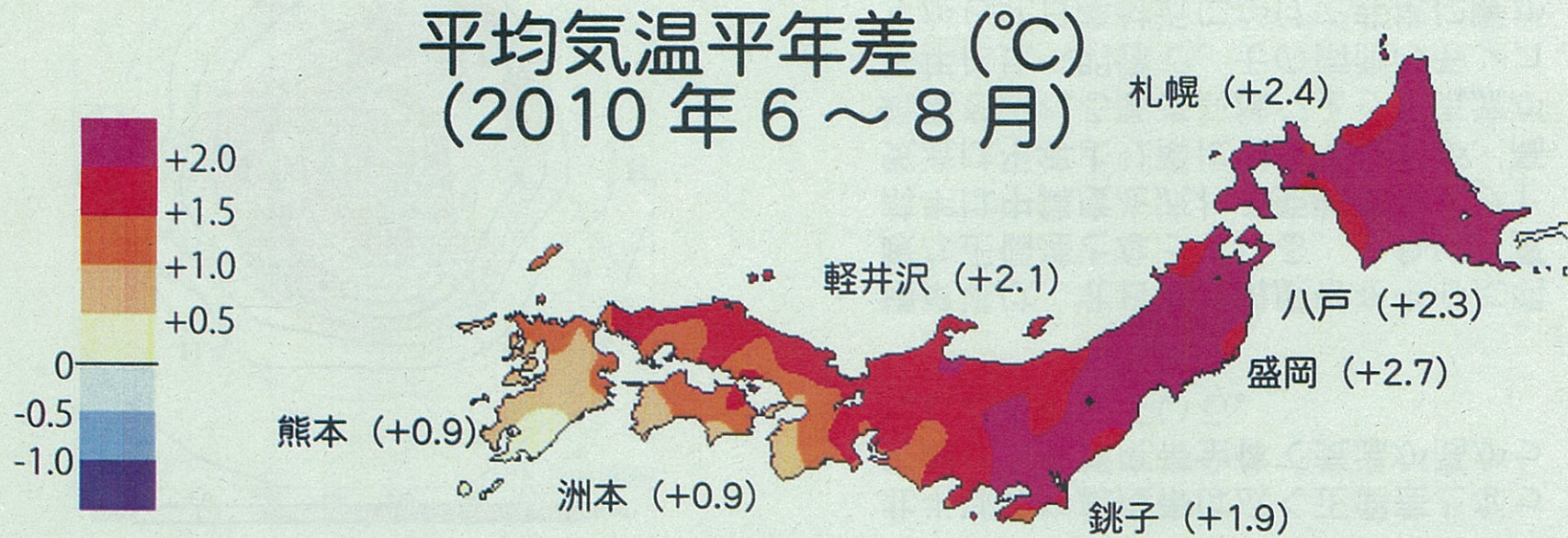
この夏及び今後の気象について
((株) ウェザーマップ)

この夏及び今後の 気象について

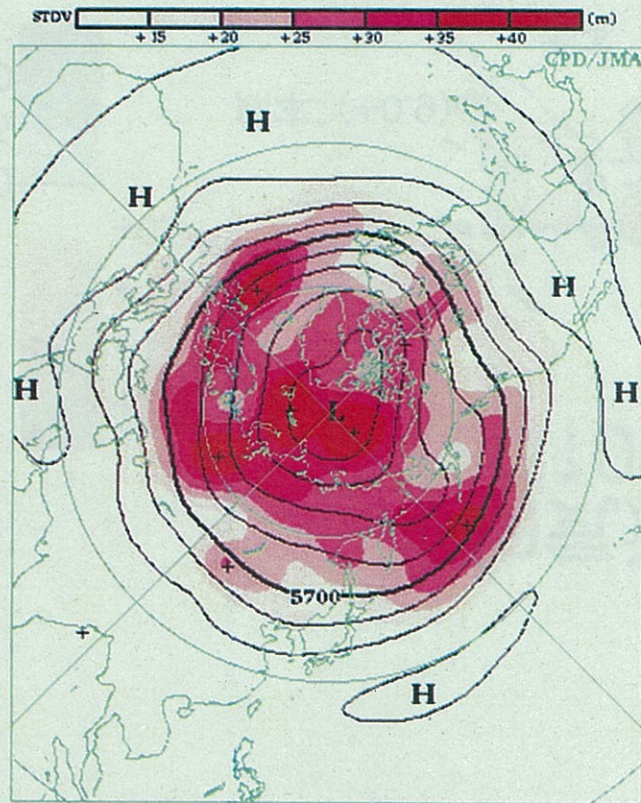
2010年夏（6～8月）の天候

- 平均気温は、北日本から西日本にかけてかなり高く（1946年以降、第4位）、北日本と東日本では1946年以降で最も高かった。また、8月の地域平均気温は、1946年以降で、北～西日本は第1位となった。
- 降水量は、北日本の日本海側でかなり多かった。
- 日照時間は、沖縄・奄美でかなり少なかった。一方、東日本の太平洋側ではかなり多かった。

2010年夏の平均気温



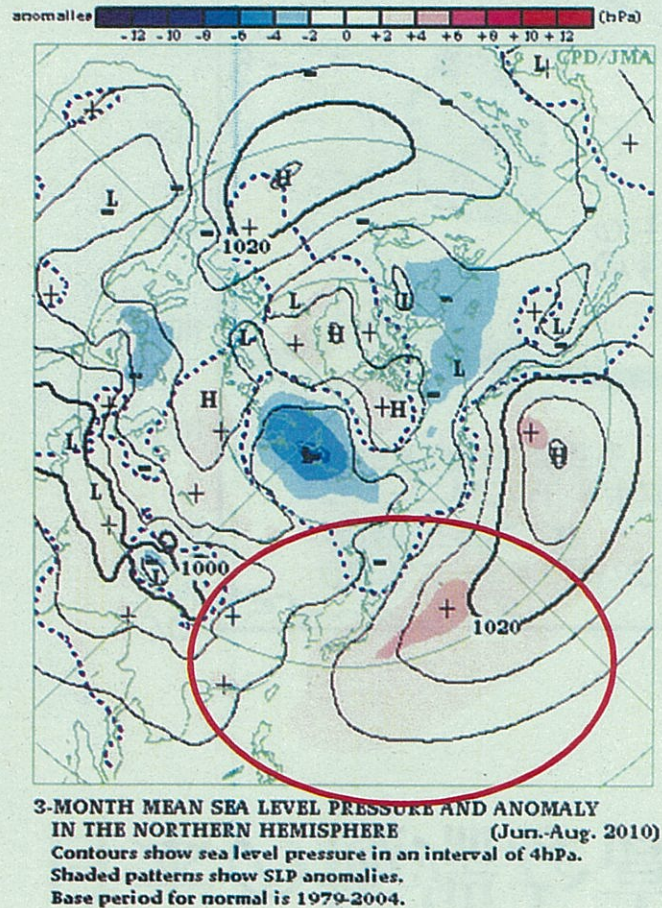
①北半球中緯度の対流圏の気温



NORMAL 3-MONTH MEAN 500hPa HEIGHT
IN THE NORTHERN HEMISPHERE (Jun.-Aug.)
Contour interval is 60m, shading show standard deviation.
Normal and standard deviation are based on 6-hourly JRA-25 for 1979-2004.

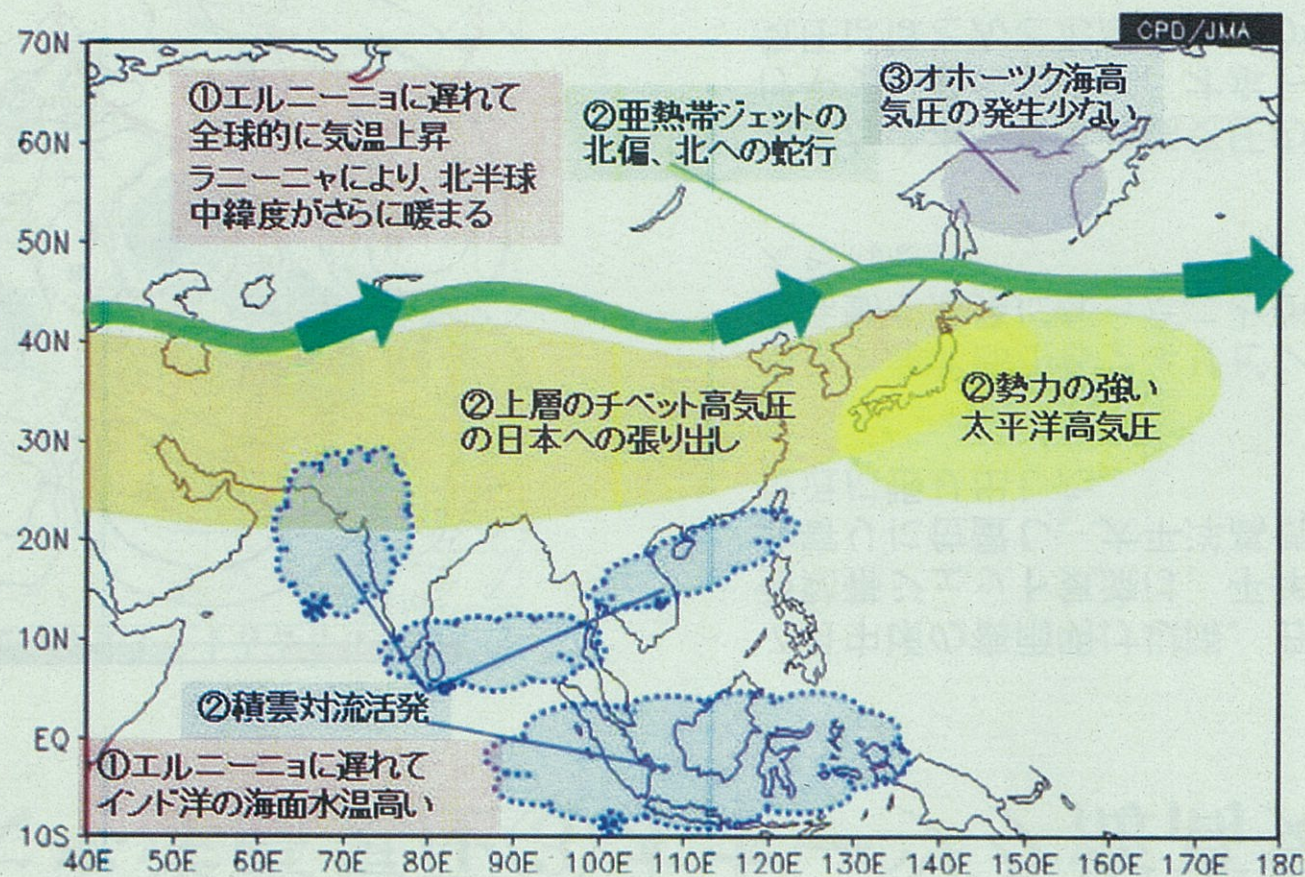
- 北半球の中緯度帯は広く正偏差となっており、中緯度帯全体で気温が高かったことを示している。
- 極東域は、北日本の緯度帯を中心に明瞭な正偏差となっている。これは、夏前半は中緯度を流れる亜熱帯ジェット気流は平年より南に偏っていたが、高緯度を流れる寒帯前線ジェット気流が平年に比べ明瞭で、その南側のモンゴルから北日本付近にかけて非常に暖かい空気が入ったことや、夏後半は亜熱帯ジェットが平年より北に偏ったことに対応している。

②太平洋高気圧③オホーツク海高気圧



- 7月中頃の梅雨明け以降、日本付近の亜熱帯ジェット気流は、平年と比べて北寄りに位置し、太平洋高気圧が日本付近に張り出した。
- 南シナ海北部からフィリピン北東の対流活動が活発になったことが一因と考えられる。
- 冷涼なオホーツク海高気圧の影響を受けやすい夏の前半に、オホーツク海高気圧はほとんど形成されなかった。

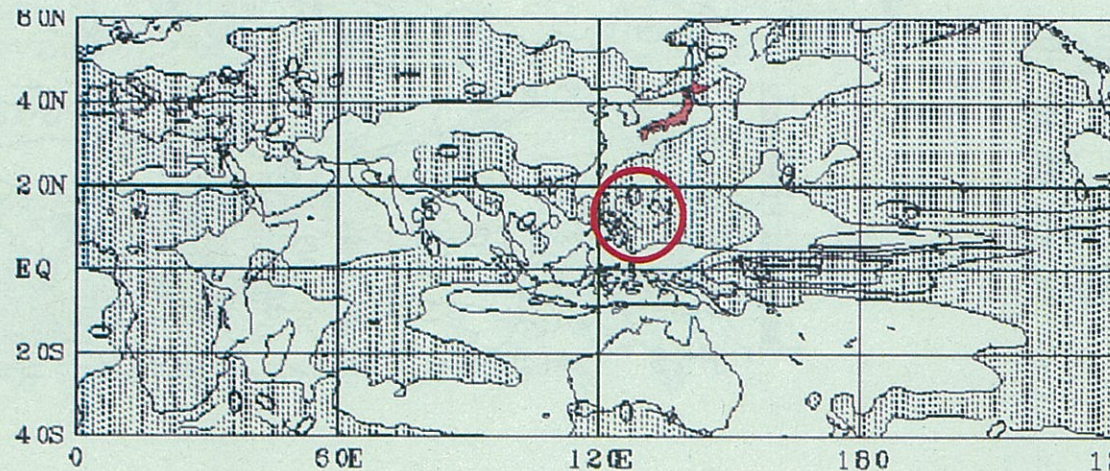
日本の極端な高温をもたらした要因



北冷西暑予想の根拠

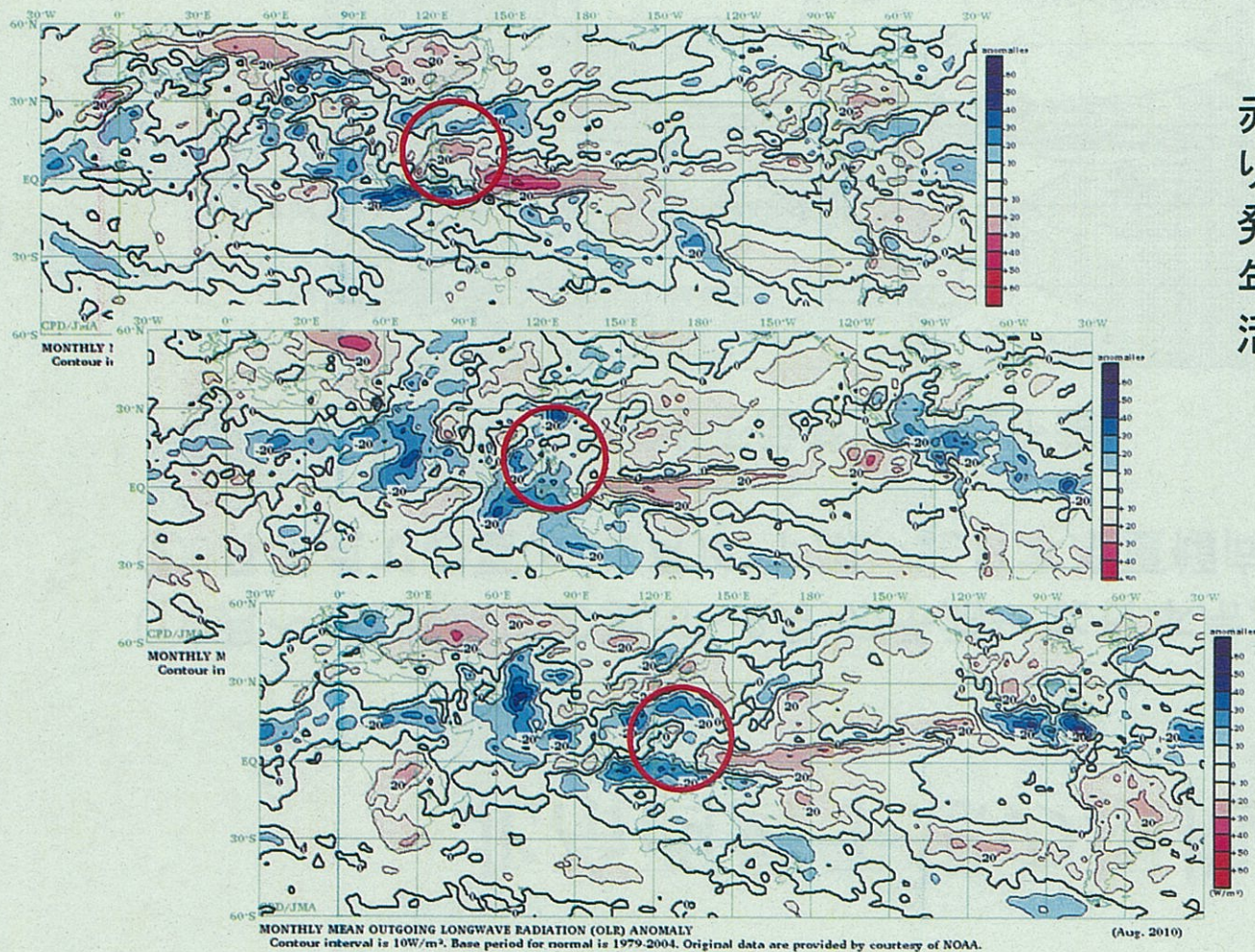
- ①2月～4月時点での夏(6～8月)の予測→北日本**冷夏**傾向
- ②5月時点での夏(6～8月)の予測→北日本**冷夏**傾向 (7～8月)

対流活動が不活発であると予想



- ③6月時点での夏(7～8月)の予測→北日本、**並～暑夏**傾向？

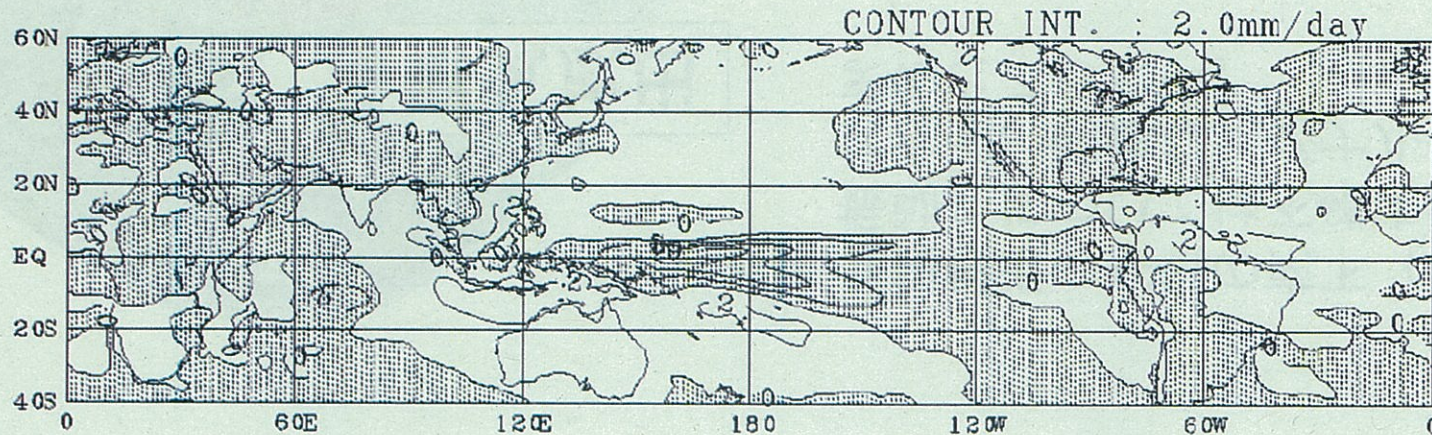
北冷西暑の根拠



赤色領域は平年より対流活動が不活発、青色領域は平年より対流活動が活発なことを表す。

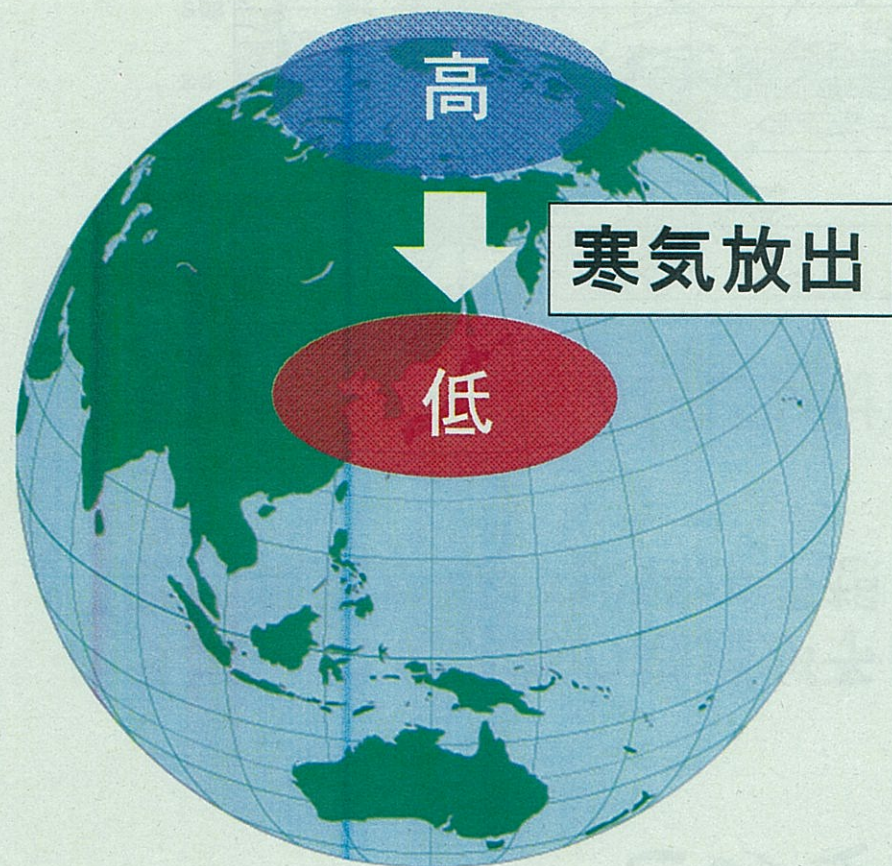
この冬の予報

- ラニーニャ現象の継続が予想され、北半球規模では中緯度の気温が高い状態が予想される。
- 南シナ海からフィリピン付近で対流活動が活発



※陰影域は平年より降水量が少ない予想で、対流が不活発と考えられる。

北極振動

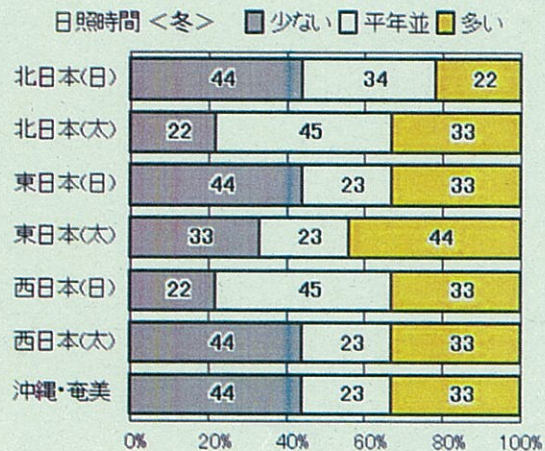
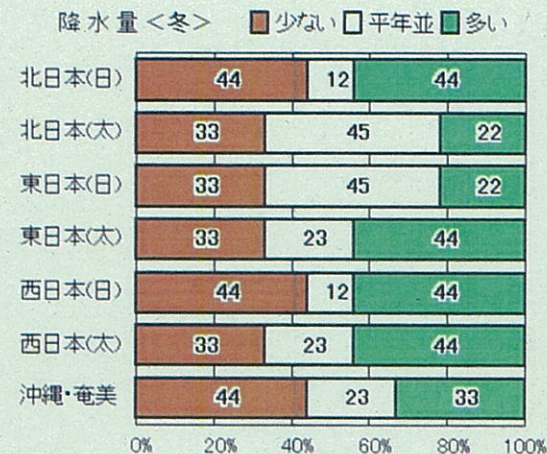
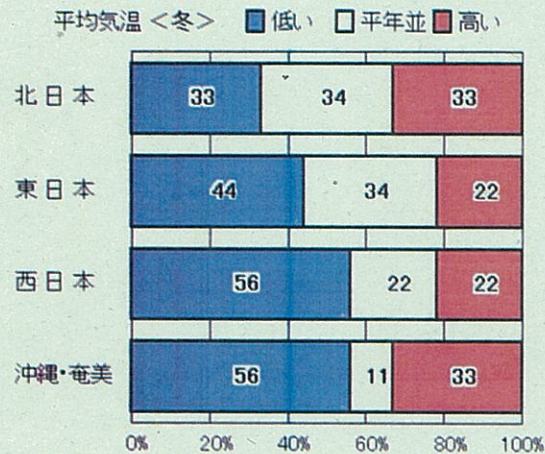


- 北極付近の寒気の南下（北極振動）については不確定性が大きく、明瞭なシグナルはいまのところない。



1ヶ月予報、3ヶ月予報に注視が必要

ラニーニャ年の冬の特徴



- 平均気温は、東日本、西日本、および沖縄・奄美で低い傾向があります。
- 降水量は、特に傾向が見られません。
- 日照時間は、北日本日本海側で少ない傾向があります。

